

婚約者の友人  
(仏独 2016年)



主人公のアンナ（パウラ・ペーア）の清楚な美しさと相手役のアドリアン（ピエール・ニネ）のイケメンぶりにうっとりしてしまった。しかも色使いがニクイ。第一次大戦直後のドイツとフランスを舞台にしたこの映画は、モノクロではじまる。こんな二人をカラーで観たいという欲求が徐々に募っていく。そこで「お待ちせ」とばかりに所要所要をカラーにして、観る者を

フランスの思い出話に熱心に耳を傾けるようになる。アドリアンが帰国する前日に、フランスの両親は彼を夕食に招待する。しかし、一向にアドリアンは現れない。アンナは胸騒ぎを覚えて、フランスの墓に行く。やはりそこにアドリアンがいた。

それは転居先不明で戻ってきてしまう。今度はアンナがアドリアンを探しにフランスに旅立つ。パリの駅に着いたアンナが目にしたのは傷病兵の群れだった。自分と同じ境遇の女性はここにもいるのだ。もはやアンナはアドリアンに心を奪われていた。

実はアドリアン来独の本当の目的は、彼らに赦しを請うことだった。雨に打たれながらアドリアンは打ち明ける。フランスの友人というのは嘘で、前線で鉢合わせしたフランスを自分とはつさに撃ってしまった。フランスの上着に入っていたアンナ宛ての手紙を読んで、良心の呵責に耐えきれずに来たのだと。

やっとアドリアンと再会できたアンナは、両親も彼を赦してくれたと嘘をつく。アドリアンは「一番うれしい言葉だ」と相手を崩す。だが嘘には報いがある。彼には婚約者がいたのだ。失意のアンナは、駅まで送ってくれたアドリアンと最初で最後のキスを交わす。このシーンが最高に美しい。ただ、直後にアンナは「もう手遅れよ」とつぶやく。不吉な結末を予感させる。

ときめかせる。

ドイツ人のアンナにはフランスという婚約者がいた。だが彼は独仏戦線で戦死してしまう。身寄りのないアンナはフランスの両親と暮らしている。そこへフランス人のアドリアンが訪ねてくる。フランスのフランス留学時代の親友だと自己紹介する。最初は心を閉ざしていた両親やアンナもやがて打ち解けて、アドリアンが語

なめられる。とはいえ心の傷は癒えない。パリのアドリアンからアンナに手紙が届く。同封されていた両親への謝罪文をアンナは暖炉に投げ入れる。両親には「勸進帳」のように白紙の手紙を読み聞かせて、アドリアンの健在を伝える。「時薬」という言葉がある。時の流れは悔やみきれない痛手でも癒やしてくれる。ようやくアンナはアドリアンに赦しの返事を書く。しか

アンナはいわばポスト・トゥルースで周囲を収めた一方、自分は二度も打ちのめされた。ラストはルーブル美術館にあるマネの作品「自殺」の前だ。意外にも、ここでアンナは「この絵を見ると生きる勇気が湧いてくる」と言い切った。『未成年 続・キューポラのある街』（一九六五年）で、ジュン（吉永小百合）が前を向いて歩いて行くラストが頭に浮かんだ。（一月二五日・シネスイッチ銀座）  
(にしかわ・しんいち/明治大学教授)